

略 歴 調 書

2020年 1月 7日

(ふりがな) 氏 名	みまた ひろみつ 三股 浩光	生年月日	1960年 2月 28日生 (59歳)
最終学歴	大分医科大学大学院医学研究科		
専門分野	泌尿器科学		
学位称号	医学博士		
学 歴			
年月		事 項	
1978年	3月	大分県立佐伯鶴城高等学校	卒業
	4月	大分医科大学医学部医学科	入学
1984年	3月	同上	卒業
	4月	大分医科大学大学院医学研究科	入学
1988年	3月	同上	修了
職 歴			
年月		事 項	
1988年	4月	大分医科大学医学部附属病院 (泌尿器科) 医員	
1989年	6月	大分医科大学医学部泌尿器科学講座 助手	
1992年	3月	米国 Yale 大学医学部泌尿器科学教室へ出張	
1993年	4月	帰国	
1996年	6月	大分医科大学附属病院 (泌尿器科) 講師	
2000年	4月	大分医科大学医学部泌尿器科学講座 助教授	
2003年	10月	大分大学医学部腫瘍病態制御講座 (泌尿器科) 助教授	
2004年	6月	大分大学医学部腫瘍病態制御講座 (泌尿器科) 教授	
2012年	4月	大分大学医学部附属病院副病院長 (医療安全担当)	
2016年	4月	大分大学評議員	
2017年	12月	大分大学医学部附属病院副病院長 (先端医療・研究担当) 現在に至る	
所属学会	日本泌尿器科学会 (代議員、前理事)、日本泌尿器内視鏡学会 (代議員、理事) 西日本泌尿器科学会 (評議員、理事)、日本排尿機能学会 (代議員、元理事) 日本透析医学会 (評議員)、日本内視鏡外科学会 (評議員) 日本老年泌尿器科学会 (評議員)、日本 Men's Health 医学会 (理事) 九州連合地方会 (理事)、九州人工透析研究会 (監事、前会長) 九州腎移植研究会 (前代表世話人) International Continence Society (会員)、国際泌尿器科学会 (会員) European Association of Urology (会員) American Urological Association (会員) Endourological Society (会員)		

<p>学会及び社会 における活動</p>	<p>日本泌尿器科学会 総務委員会委員、広報委員会委員、教育委員会卒後教育部 会委員、医療安全対策委員会委員、会則検討委員会委員 日本泌尿器内視鏡学会 将来計画委員会副委員長、ストルツ賞選考委員会委員 長、学術委員会委員、ガイドライン委員会委員、泌尿器腹腔鏡手術ガイドラ イン作成委員会委員長、医工連携・新技術検討委員会委員、教育委員会副委員長、 WEBビデオ検討委員会委員、広報委員会副委員長、がん病巣標的化前立腺部分治 療検討部会副部長、e-learning システム委員会委員、腹腔鏡技術認定審査員 日本内視鏡外科学会 ガイドライン委員会委員、総務委員会委員、倫理・渉外 委員会委員、学術委員会委員 日本透析医学会 専門医制度委員会研修プログラム小委員会委員、カリキュラ ム小委員会委員、専門医認定小委員会地区委員 日本排尿機能学会 将来計画委員会委員、単孔式内視鏡手術研究会 世話人 泌尿器分子・細胞研究会 世話人、泌尿器再建再生研究会 世話人 腎移植・血管外科研究会 世話人 日本学術振興会科学研究費委員会専門委員 大分県臓器移植医療協会理事長、大分県腎不全対策委員会委員 大分県臓器移植委員会委員 大分県排泄リハビリテーション・ケア研究会 共同代表世話人 大分県医師会院内事故調査支援委員会委員</p>
<p>免許・資格等</p>	<p>医師免許 第 281914 号 医博甲 大分医科大学 第 14 号 日本泌尿器科学会 専門医 第 91030011 号 日本透析医学会 認定医 第 2250 号 日本泌尿器科学会 指導医 第 96029421 号 日本透析医学会 指導医 第 1156 号 日本泌尿器内視鏡学会 技術認定 認定番号 05-110-3 日本内視鏡外科学会 技術認定 (泌尿器腹腔鏡) 認定番号 13-EE-051 日本排尿機能学会 排尿機能専門医 第 0163 号</p>
<p>賞 罰</p>	<p>なし</p>
<p>その他参考と なる事項</p>	<p></p>

(教育に関する業績)

卒前教育では、医学科学生 2 年生に医学生物学を、3 年生にはチュートリアル教育の責任者を担当しています。4 年生の研究室配属では腎泌尿器外科学講座の基礎研究の実験を指導し、研究の面白さを教えています。5 年生（現在は 4 年生）の臨床実習では、主に外来で診察法と泌尿器科検査を教えています。また、看護学科 2 年生には成人看護学として腎・泌尿器疾患の講義を行なっています。大学院教育では修士課程修了 2 名、在学中が 4 名おり、これらのうち 5 名が排尿関連の研究を、1 名は腎不全関連の研究を指導しています。博士課程は現在 4 名が在籍しています。私が教授に就任して以降、17 名が医学博士号を取得しました。

卒後教育では、本院と関連病院にて修練させ、日本泌尿器科学会の専門医・指導医を取得させた後、本人の興味や希望に合わせて、日本透析医学会専門医、日本排尿機能学会専門医、日本泌尿器内視鏡学会腹腔鏡技術認定、日本内視鏡外科学会技術認定（泌尿器腹腔鏡）、日本臨床腎移植学会認定医、日本移植学会認定医、日本小児泌尿器科学会認定医等を取得させております。

(診療に関する業績（医療安全に関するものを含む）)

主に泌尿器科診療及び血液浄化センター、医療安全管理部とクオリティマネジメント室の運営に携わってきました。

泌尿器科診療では、入院治療を要する疾患では、ほぼ泌尿器科全領域を網羅する診療内容で、泌尿器癌、尿路結石症、尿路感染症、腎不全（透析医療、腎移植）、女性泌尿器科（尿失禁、性器脱）、小児泌尿器科疾患、副腎疾患、副甲状腺機能亢進症、男性不妊症等の診療を行ってきました。特に低侵襲治療では、本邦で逸早く単孔式腹腔鏡手術を導入し、日本泌尿器内視鏡学会の単孔式腹腔鏡手術検討部会の部会長としてワークショップ開催や全国多施設共同研究を主導し、さらに Reduced Port Surgery の導入と普及に努めてきました。またロボット支援腹腔鏡手術では、私は本院での前立腺全摘除術や腎部分切除術、膀胱全摘除術を全て安全に導入しており、現在は教室員に指導し、いずれも安全に実施できております。

血液浄化センターは病院再整備時に 7 床から 15 床に増床し、これまでは検査や手術を目的とした透析患者のみを対象としてきましたが、安定した稼働率を維持するため、本年からは柴田センター長の下で維持透析も開始する予定になっています。

医療安全に関しましては、2000 年より医療安全管理部運営委員、2004 年よりリスクマネジメント委員会委員、2012 年から 2017 年まで医療安全管理部長を勤めました。国立大学病院医療安全管理協議会の相互チェックやピアレビューを実施し、他大学の優れたシステムや事例を参考に、本院における医療安全の改善に努めてきました。

(研究に関する業績)

臨床研究では主に低侵襲手術手技の開発を行ってきました。特に泌尿器科領域の単孔式腹腔鏡手術と Reduced Port Surgery では本邦を牽引し、外科中心の単孔式内視鏡手術研究会では他科として初めて私が会長として第 11 回本研究会を開催しました。これらの低侵襲手術に関しては、全国多施設共同研究として現状調査を行なって英文雑誌に報告しました。現在も複数のテーマで共同研究を続けており、従来の腹腔鏡手術を進化させて、より安全で低侵襲な術式の開発に努めています。私が施行した本術式は、第 28 回日本泌尿器内視鏡学会総会賞や第 30 回世界エンドウロジー学会にて Olympus Best Poster Award (Best New Innovation Paper) を受賞しております。

基礎研究では、外尿道括約筋から横紋筋幹細胞を分離培養し、高齢者における外尿道括約筋の脆弱機序を解明し、尿失禁に対する新しい再生療法の開発を目指してきました。この研究は世界的にも当教室だけが研究しているテーマ、オリジナリティーの高い研究として高く評価されており、日本排尿機能学会の河邊賞や西日本泌尿器科学会ヤングウロロジストリサーチコンテスト最優秀賞等、多数受賞しています。また、排尿関連の基礎研究では米国ピッツバーグ大学泌尿器科学教室の吉村直樹教授の下に 3 名の教室員を留学させ、現在も共同研究を続けております。癌領域では、分子病理学との共同にて腎癌のゲノム異常に関して研究を続けており、これまでに本学の中塚医学賞や西日本泌尿器科学会ヤングウロロジストリサーチコンテスト最優秀賞等を受賞しています。前立腺癌に関しては、解剖学教室と共同で低酸素環境下の前立腺癌細胞の悪性化増強を研

究しており、こちらも中塚医学賞や西日本泌尿器科学会ヤングウロロジストリサーチコンテスト優秀賞等を受賞しました。

私は、競争的獲得資金では、1989年に助手になって以降、留学中の2年間と助教時代2年間、教授時代1年間を除く25年間にわたり、科学研究費補助金13件を代表研究者として取得しました。その他、長寿医療センターより9年間、総額1640万円取得しております。また、教授に就任してから、教室の科学研究費補助金は27件、約1億円を獲得しています。

(地域医療への貢献に関する業績)

大分県下18施設に常勤医を、25施設に非常勤医を派遣しており、診療患者はほぼ全県から集まって来ております。低侵襲治療を推進しており、腹腔鏡技術認定取得者の常勤医は8病院に勤務しており、取得者のいない病院へは、非常勤医を手術応援に出しています。大分県では別府・大分市での医師の集中・偏在が問題になっていますが、泌尿器科では日田市を除いて全医療圏に常勤医師を派遣しており、満遍ない地域医療を目指しています。

腎不全医療に関しては、大分県下の9病院と10医院で透析管理を行っており、腎移植は毎年10例前後施行しています。現在、私は大分県人工透析研究会会長と大分県臓器移植医療協会理事長を務めており、大分県下の透析に関する講演会や研究会、腎移植の普及啓発活動を行っています。また大分県腎不全対策委員会や大分県臓器移植委員会の委員を務めて、行政や大分県医師会と連携し、大分県下の腎不全医療の向上に寄与しております。平成28年熊本地震では熊本県の透析医療は多大な被害を受けました。これを契機に、私は大分県臨床工学技士会と大分県透析医会、大分県人工透析研究会と共同で、大分県下の全透析施設の災害対策を調査し、災害対策マニュアルの作成を指導しました。また、九州人工透析研究会や九州腎移植研究会の代表も歴任しています。特に50年を超える歴史ある九州人工透析研究会の代表時代には、研究会誌を創刊し、大分県だけでなく九州全体の腎不全医療の向上に寄与しました。

超高齢社会を迎え、慢性期病院や老健施設、介護施設あるいは在宅で働く多職種のメディカルスタッフや家族の間では、高齢者の排尿管理が切実な問題となっております。2012年に、看護師や理学療法士、作業療法士、介護福祉士等のメディカルスタッフから要請を受け、大分県排尿リハビリテーション・ケア研究会を立ち上げました。以来、代表世話人として企画・運営に関わっており、毎年2回の研究会と年1回の実習を開催し、毎回100名以上が参加して、好評を得ております。2017年からは排便の問題も取り上げ、大分県下の高齢者排尿・排便管理の向上に寄与しており、この研究会は今後の地域包括ケアにとって重要な活動と考えております。

(病院経営・管理運営に関する業績)

血液浄化センター長として16年間、材料部長は約10年間、医療安全管理部長を4年半、クオリティマネジメント室長を約2年間務めております。私の材料部長時代に現在の新規医療材料の採用条件を作成し、円滑な導入を進めてきました。当時は、本院の経営は黒字が続いておりましたので、高難度の医療や新規医療技術の開発に取り組んで頂くため、可能な限り各診療科医師の要望に応じてきました。しかし、現在の経営状況では、同種同効品を集約し、経費削減に努めるべきだと考えております。クオリティマネジメント室長として、高難度新規医療技術や未承認新規医薬品の安全な導入を目指し、特定機能病院の承認要件ではありますが、制限するだけでなく、先進医療に繋がるよう、安全に配慮して管理運営してきました。また、2019年からは臨床指標の管理も行っており、本院診療における安全で効率の良い診療を目指して来ました。

私は、本学医学部からの海外留学生や国際会議への参加が年々減少していることを憂慮していたため、2012年に副病院長として病院経営の会議に参加した際、年間1000万円程度の海外留学支援制度の新設を提案致しました。本制度の目的は、目先の海外留学や論文発表の数を増やすだけでなく、国際的視野を持った人材を育成し、本学医学部の発展に寄与することです。腎泌尿器外科学講座では、本制度を利用して留学した教室員らが、帰国後に講師や准教授に昇任し、本学医学部や地域医療のために活躍しています。今後もすべての職種の職員に対し、海外への出張・留学を推奨し、本学の発展に寄与する人材育成を推進するべきだと思っています。

2019年は病院機能評価を受審しましたが、統括責任者として未整備な部署を改善し、新たな組織を作って対応しました。門田病院長のご指導の下、全職員の協力にて、C評価は3つだけで済みました。

(その他(国際交流等)の業績)

腎泌尿器外科学講座では中国の河北医科大学より2名の泌尿器科医と1名の腎臓内科医を留学生として受け入れ、さらに1名は大学院博士課程に進学し、博士号取得後に帰国しております。また当講座教室員は、これまでに米国のイエール大学、ハーバード大学、ピッツバーグ大学、エモリー大学、南カリフォルニア大学、サンフランシスコ大学に留学しました。現在もピッツバーグ大学と排尿関連の共同研究を、南カリフォルニア大学とは前立腺癌の低侵襲治療について共同研究を続けております。また、当講座の特任教授の一人は、学長の推進するアジア内視鏡人材育成大学コンソーシアムの活動に協力し、インドネシアにて泌尿器腹腔鏡手術の指導を行っています。

※10.5ポイントの明朝体を使用して作成願います。